

暗黙の伝達の諸相——含意と指標性

荒木 瑞夫

1. 序

Grice (1975) による「言われていること (what is said)」と「含意されていること (what is implicated)」の区分以来、言語学（とりわけ語用論）において後者が正当な研究対象となり、多くの知見をもたらしてきた。表層的・形式的な言語表現を乗り越えるその枠組みは、表面上は「言わ」れていないものの、類型化し得る様々な意味作用についての分析の手だてをもたらした。また近年、認知言語学は、従来修辞上の技法とされ、被説明項として扱われてきたメタファーやメトニミーを心理学的に正当な説明項として位置づけながら、さまざまな言語現象の説明を試みている (Lakoff & Johnson 1980; Lakoff 1987; Langacker 1987, 1991)。両者は、根本的な言語観・コミュニケーション観を異にしており、なかなか個別の議論でかみ合うことがない。しかしながら、両者の比較は、当該のアプローチの射程を知る鏡となり、また理論の枠を離れたパースペクティブをもたらすこともあろう。

本稿では、関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995) も含めた、Grice 的な語用論のアプローチにおける「含意 (implicature)」とそれが前提としている全体的なコミュニケーションモデルを、認知言語学における関連する議論を概観することで、あらためて検討する。具体的には、Langacker (1993) の「参照点 (reference point)」を用いて Grice 的な含意 (implicature) をも射程に入れることを提案する山梨 (2000, 2001) の「参照点起動の推論モデル」を検討する。

また、「伝達における発話の指標性」(山梨 2001: 159) という観点に着目し、それが Grice 的な意図伝達と推論に基盤をおくコミュニケーション・モデルとどのような関連・相違があるかを考察する。

まずはじめに、後の議論での混乱を避けるために、「指標性 (indexicality)」という概念の整理を行なう (2 節)。次に、根本的な記号観の相違に留意しながら Grice の含意 (implicature) という概念を確認する (3 節)。そして、Grice 流の推論モデルとは異なる対案として、山梨 (2000, 2001) が提案する「参照点起動の推論モデル」を検討していく (4 節)。それらを経た上で、これら記号観・コミュニケーション観の根本的な違いから導かれる諸問題を考えていきたい。

2. 指標性：Peirce 的な記号観

「指標性 (indexicality)」は近年様々な側面から研究されている。その概念としての規定は一様とはいいがたいが、おおむねアイコン (icon)/指標 (index)/シンボル (symbol) という Peirce の記号の 3 分類に基づいているといえよう。このような記号観は、シンボルに重点を置く記号観 (Saussure 的な記号観もそれにあたる) に対して、記号の多面性を捉える道具立てとして注目されている (Cf. 有馬 2001)。「指標 (index)」の一般的な了解は

「記号の一種で、それが意味するところの対象の存在を暗に示すタイプのもの」(Lyons 1995: 15) といったところだと思われ、具体例としては「煙と火の関係」とか「風見鶏と風向きの関係」、「ろれつの廻らない舌と泥酔度の関係」などがあげられたりする。Peirce 自身の定義によれば、指標記号とは、「対象との類似性や類比によるのでもなく」、「一方では個体的な対象と、他方ではその人にとってそれが記号として役立つ人の感覚や記憶とのダイナミックな結合関係を持っていることによって、その対象を指示するところの記号あるいは表意体」(内田訳: 50-1) である。対象との連続性 (contiguity) によってその対象 (の存在) を示すタイプの記号という理解でよいと思われる。また言語学において、とりわけ「指標性 (indexicality)」といったとき、その具体的研究として、地域的な方言およびアクセントや、エチケットを示す表現、ジェンダーを示す表現、指示的な代名詞・指示詞の使用、テンスなどの研究まで含まれることがある (Cf. Hanks 2001: 119)。これらに共通するのは、言語使用の状況における「連続性・近接性」に基づく意味作用・指示機能への関心であるといえる。地域的な方言は話し手が時間・空間的に実際に当該の地に存在したために身に付くものであるし、エチケットはフォーマルな振舞いが要求される場に話し手が実際にいることがその使用の根拠になっているし、指示詞の使用は話し手が具体的な状況において世界の事物を指し示すことに直接関わっている。

ただ、これら様々な事象が「指標性」という概念で括られることにはいかなる理論的帰結があるのかは不明な部分も少なくない。たとえば、Silverstein (1976) は、指示的なもの (referential) と非指示的なもの (non-referential) を区別することを提案している。指示的な指標性は、指示詞や代名詞の指示的な使用にみられるように、当該の記号が時間-空間的に特定可能なものを指すことを主要な機能としているのに対し、非指示的な指標性は、記号自体は指標する対象を指示するのが主ではなく、指標機能は随伴的 (incidental) なものに留まっている、ということである。たとえば日本語の「おれ」「僕」という一人称の人称代名詞はそれらが使用されるとき、話し手本人を指すが、それと同時に話し手が「男」というジェンダーを有していることを指標してもいる。前者は指示的、後者は非指示的である。本稿では社会・文化的なものも含めて、この非指示的な指標性を主に問題にすることにする。

後にみるように、認知言語学は記号の多面性にウェイトをおき、Peirce の記号論、あるいは指標性という考え方と通底している。

3. Grice の含意：コミュニケーションという観点

Grice は言語の使用に伴う多様な意味作用に対する分析の枠組みを提供したが、Grice (1975) が意味論に関しては記号論理学 (symbolic logic) を仮定しているように、その枠組みはシンボリックな記号観を前提としている。その記号観は、語用論に取り入れられた彼の言語使用に関する考えとも密接に関連している。ここでは彼のコミュニケーション・モデルと、それに基づく含意 (implicature) という考え方を確認する。

Grice (1975; 1989) のモデルは「文字通りに言われたこと」だけでなく、「暗に言われたこと (what is implicated)」を説明する道具立てを提供することになったが、基本的にそのモデルは Grice (1957) で中心的に扱われている「コミュニケーションの推論モデル (inferential model of communication)」を前提としている。推論モデルにおいては、コミュニ

ケーションの本質は、話し手による伝達という行為と、聞き手による話し手の元の意図についての推測であるとされる。たとえば、以下は Grice の例だが、ここで話し手 Paul は “Smith has, or may have, a girlfriend in New York” ということを含意 (implicate) していると考えられる (Grice 1989: 32)。

- (1) a. John: Smith doesn't seem to have a girlfriend these days.
b. Paul: He has been paying a lot of visits to New York lately.

上記の含意 “Smith has, or may have, a girlfriend in New York” が話し手 Paul の伝えようと「意図」したことであり、聞き手の解釈作業の实质はその「意図」を推論によっておし測ることであるというのが Grice の推論モデルの基本的なコンセプトである。

次の例も見てみよう。

- (2) a. John: Would you like some coffee?
b. Jane: I have to go to a lecture.
(3) Jane is unable to have coffee with John.

(2)の会話で、Jane は(3)を含意していると考えられる。まず一見して明らかなのは、Jane の発話 (2 b) は John のコーヒーの誘いに対して明確に答えていない、ということである。その意味で、たとえば関係の格率 (「関係のあることを述べよ」) を破っているといえる。しかしながら、Jane が協調の原理を遵守しており、さらに「Jane は講義があるから、John とコーヒーを飲んでいられないと考えている」と仮定するならば、(3)こそが Jane が (2 b) によって伝えようと意図したことだという推論が可能となるのである。(1)(2)の例でわかるとおり、Grice の含意 (implicature) という意味作用は話し手の当該の発話行為の元となる意図を不可欠な前提としている。

ところで、Grice の理論を認知科学的に精緻化したといわれる関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995) では、(1 b) (2 b) の発話の含意の導出に関して、より形式的な説明を与えている。まず聞き手の側に大まかに次のような百科事典的知識 (あるいはそれに基づいた想定) が必要とされると考える。(4)は(1)に、(5)は(2)に対応)

(4) <百科事典的知識>

If someone pays a lot of visits to somewhere, he has something to do there.

<それに基づく想定>

If Smith pays a lot of visits to New York, he has something to do there, perhaps meeting his girlfriend.

(5) <百科事典的知識>

If someone has to attend a lecture, he/she does not have so much time.

<それに基づく想定>

If Jane has to go to a lecture, she does not have enough time to have coffee with

John.

関連性理論では、これらの想定が発話の表出命題とともに演繹的な (deductive) な推論の「前提」を構成し、「結論」として含意が算出されるという心理学的モデルを仮定する。もっとも、推論はランダムに行なわれるのではなく、推論の前提となる(4)(5)のような文脈想定 (contextual assumptions) の選択も含めて、次の「関連性の原理 (principle of relevance)」に沿う形でなされると仮定される。

(6) 関連性の伝達原理 (第2原理)

すべての意図明示的伝達行為は、その行為が最適の関連性をもつことを自動的に伝えている。

Grice の理論も関連性理論も、含意 (implicature) という意味作用は、当該の伝達行為において話し手が持っていたと推定される意図への推論から生じてくるものであり、基本的にはコミュニケーションを前提としていることに注意しよう。このような意図明示的なコミュニケーションの重視は、これら Grice 的な語用論における言語記号の扱いと不可分である。つまりこれらの理論の関心は、話し手の意図の伝達に限定されており、話し手の意図が具体的なコンテキストで制御しうる限りの記号の性質が主な研究対象となるのである。言葉は発話主体とは独立した道具とみなされ、それはシンボリック記号観とより適合するだろう。

ところで、Grice の含意の下位分類 (上記の例はいわゆる会話の含意 conversational implicature) の一つとしての「規約的含意 (conventional implicature)」についてもふれておきたい。Grice は発話の伝達内容のうち、計算的に導出される訳ではないが暗黙に伝達されるものとして例えば次のようなものを規約的含意として区分した。

- (7) a. It's Christmas Eve *but* the shops are empty.
 b. The two states of affairs described in (a) are contrasted in some way.
 (8) a. He is an Englishman; he is, *therefore*, brave.
 b. His being brave is a consequence of his being an Englishman.

(西山 1999: 32, イタリック引用者)

(7a)(8a) の発話は、それぞれ (7b)(8b) をも伝達するのが普通である。ただ、(1)や(2)のケースとは異なり、協調の原理や会話の格率は関与していないと考えられる。また、(7b) や (8b) の命題に話し手はコミットしているようでありながら、(7b) や (8b) は (7a) や (8a) の発話の真理条件を構成しない。仮に (7b) (8b) が偽であっても、(7a) (8a) は真になりうるからである。この種の英語の表現としては、他に even, yet, let alone などが挙げられるが、非真理条件的でありながら、会話の含意とは異なる意味作用をもつと考えられる。Grice の理論ではこれらは特定の言語表現に慣習的に結びつけられているため規約的含意 (conventional implicature) と名付けられている。

関連性理論では、これらの言語表現の多くは手続き的意味 (procedural meaning) とい

うタイプの言語的意味を持つものとして分類され、シンボリックに世界を表示する概念的意味 (conceptual meaning) を持つ語と違い、発話解釈のプロセスの方向性に指示を与えるものであると位置づけている。Grice の理論と大きく異なるのは、言語的意味の中にこの手続き的意味を位置づけたことである。

4. 指標性と含意：参照点起動の推論モデル

記号そのものに豊かな多面性を見ていこうとする Peirce 的な記号観と、記号のシンボリック側面にウェイトを置きながら様々な意味作用をコミュニケーションのダイナミズムとして説明しようとする Grice 流の語用論の考えを瞥見してきた。前者の観点にたつと Grice 的な現象はどう見なされうるだろうか。記号の意味論的な多面性を重視する認知言語学は Peirce と記号観を共有する点も多いが、意味論と語用論の境界はない、あるいは少なくとも明確には区別できないという主張を行なっている。以下で、認知言語学の枠組みから発話解釈の推論プロセスを説明しようとする山梨 (2000, 2001) の考えを見てみよう。

山梨 (2000, 2001) の「参照点起動の推論モデル」は Langacker (1993) の「参照点 (reference point)」という概念を下敷きとしている。Langacker (1993) は、メトニミーなどに典型的に見られる現象を、より一般的な認知能力である参照点能力 (reference-point ability) を前提とした現象であるとし、多くの言語現象がこの能力を背景にもっているとしている。その能力のプロセスは下記のように図示される。

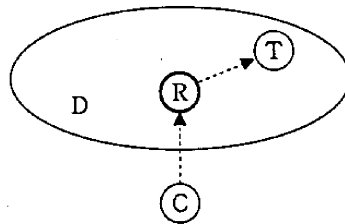


図1

この図は認知主体 C (conceptualizer) が T (target) に心的にたどり着くまでの認知プロセスを描いており、ここで認知主体 C は中継点としての参照点 R (reference point) を介して T にたどり着いている。矢印はその心的な経路を表し、D (dominion) と名付けられた楕円の領域は参照点によって限定されるターゲットの支配領域を表しているとされる。たとえば、「赤シャツ」という表現である人物を指す場合、赤シャツが参照点 (R) として用いられており、それを介して当該の人物 (T) への心的到達が達成されると分析される。このようにいわゆるメトニミーだけでなく、照応、指示表現、話題化など統語論・意味論にわたるさまざまな言語現象の背後にも参照点構造が存在するとされる (Cf. 山梨 2000 : 85-104)。

このようにもともと「参照点能力」はかなり一般的能力として規定されているが、山梨 (2000 : 113-116 ; 2001 : 139-161) はさらに語用論的推論のモデルとしての応用の試みを行なっている。

まず一般的な語用論的推論プロセスのモデルは次の図のように仮定されている。

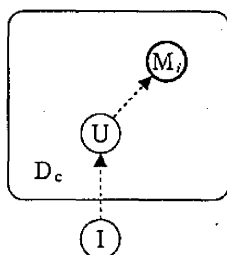


図2

Iは解釈者 (interpreter), Uは当該の発話 (utterance) そのもの, M_i は当該の発話の意味とされ, また D_c でマークされる領域は, 当該発話が潜在的に規定する解釈の候補のドメイン (domain of candidates) と規定されている。図1の示すモデルとはほぼ同型であることから明らかなように, これは発話の語用論的解釈にもメトニミーによる指示表現に通底する参照点構造を見いだそうとする提案である。

このモデルでは含意はどのように扱われるのだろうか。それは Langacker (1993) の参照点構造における参照点/ターゲットの推移と平行的に扱われる。たとえば次のような推論の連鎖の現象が例として挙げられている (山梨 2001: 153-154)。

(9) Can you open the door?

(10) Why don't you be quiet?

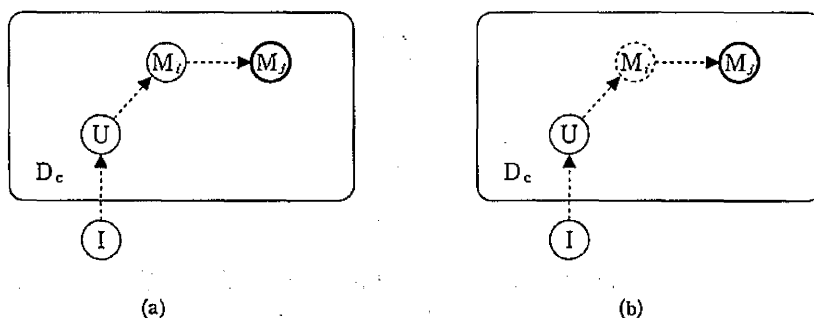


図3

(9)をいわゆる「依頼」の間接発話行為とみなした場合, 文字通りの意味としての質問の意味 (M_i) とそれから推論によって導かれる依頼の意味 (M_j) が見いだされる。しかし, 解釈において, M_i は M_j を「起動させるため手がかりとして背景化されている」(山梨 2001: 154)。この背景化の度合いは(10)においてさらに進んでおり, (10)では疑問の意味 (M_i) はほとんど感じられない。それを図示したのが図3 bであるという。

これらの図は M_i から M_j へと至る推論がいかなる種類のものであるかは特定していない。しかし, このモデルが「メトニミー」的現象を包括的に捉えようとする Langacker のモデルに依拠しているように, ここには山梨が「メトニミー的な伝達」と呼ぶ考えが背後にある。たとえば(9)が語用論的に「依頼」という発話行為として理解されたとした場合 (図3 aでは M_j が「依頼」に相当), それはそもそも「依頼」という発話行為が以下のような条件によっ

て成り立っていることが前提となっているという。

表1 依頼の発話行為の前提

行為成立の必要条件
1. 話し手の側からの行為遂行への願望・興味・欲求
2. 聞き手の行為遂行の能力・意志・義務
3. 行為遂行の動機・意義・理由
4. 行為遂行の否定条件
5. 行為遂行の結果に対する判断・評価

(山梨 2001:149)

(9)は必要条件の2に言及しており、この言及(部分)から「部分-全体」に基づく「メトニミー的」な推論を通して、「依頼」(全体)という解釈が得られるとする。山梨によれば、この推論は、「 $P \rightarrow Q$ 」と「 Q 」という前提から「 P 」という蓋然的な帰結を導き出す、いわゆるアブダクションの一種だとしている(山梨 2001:150)。

また、(9)のような疑問の表現はやがて慣習化されることはあり得ることである。図3 aで言えば直接 $U \rightarrow M_j$ (依頼) となっていく傾向にある(つまり図3 b)ということだが、語用論的推論の慣習化のこのような分析は「参照点起動の推論モデルは、この伝達における発話の指標性を考慮して提案されている」(山梨 2001:159) ことと通底している。また、Griceの枠組みで言えば、この種の意味作用は規約的含意(conventional implicature)と共通するところが多く、規約的含意(の全てではないにせよ一部)と指標性という記号の側面の共通性をも示唆していると思われる。

ところで、山梨(2001)の提示している「語用論的推論」の事例は、間接発話行為、あるいは規約的含意に関するものに限られているが、(1)(2)のような典型的な会話の含意(conversational implicature)の事例についても同種の説明ができるかもしれない。

たとえば、(1b)の発話の含意について、“Smith has, or may have, a girlfriend in New York”と説明したのはGrice自身だが、もし聞き手(この場合John)が相手の発話の表出命題“Smith has been paying a lot of visits to New York lately”と自らがもつ百科事典知識に基づく厳密な論理的計算のみから会話の含意を引き出すとするなら、含意を表す上記の命題中の、蓋然性を示す“may”という語の由来が不明のままとなる。もちろん(1)のクリプトだけでは断定できないが、(1b)におけるPaulの答え方、すなわちはっきりと“Smith has a girlfriend in New York”と言わずに、その部分的な証拠になり得る“He (Smith) has been paying a lot of visits to New York lately”というに留めていることがGriceの“may”という語の由来だと考えることは可能かもしれない。つまり、さきほどの山梨の「メトニミー推論」の説明に習えば、“Smith has a girlfriend in New York”という断定が「全体」にあたり、それを裏付ける複数の証拠のうちの一つである“He (Smith) has been paying a lot of visits to New York lately”が「部分」にあたるということである。“may”の由来は、それを含む命題を導出する推論そのものが蓋然的な推論であること、という訳である。

さらに、(1b)の発話と(1)の対話全体の間にも別の「部分-全体」関係を見いだすこともで

きる。(1)では「Smith氏にガールフレンドがいるかどうか」が話題になっているが、仮に Paul が以下のように(1'b)と言ったとしたらどうだろうか。

- (1) a. John: Smith doesn't seem to have a girlfriend these days.
b. Paul: I will take him to the party this weekend.

Johnの発話を友人 Smith 氏の状況をふまえた(?)の暗黙の依頼ととれば(1'b)のように答えることもできる。しかし Paul が実際には(1'b)ではなく(1b)と応じたということから、Paul の実際の発話「JohnがSmith氏にガールフレンドがいるかどうかということに関心をもっており、そのことについて Paul の知っていることを述べるのが要求されている」という状況全体を指標(index)しているという側面を指摘することもできる。

(2)についても同様で、Janeは(2b)と言うことで、それと同程度に(3)にコミットしているとは必ずしも言えない。先行する(2a)という発話(勧誘)によって、Janeは受容/拒否の選択を要求されているコンテキストであるが、その選択の条件を構成する現在の事情をひとまず(2b)という形で述べているだけかもしれない。Janeの答えは、そのようなコンテキスト全体を少なくとも「認識」していることを指標していると思なすことができる。

ここにたって、このモデルによって提起されている問題の一つは、指標性と語用論的含意(会話の含意)の間の共通性と差異である。山梨はたとえば次のような言及を行なっている。

日常言語の伝達のプロセスは、話し手が発する言語表現とその発話文脈における非言語的な手がかりを聞き手が参照しながら、その背後の意味を主観的にくみ取っていくダイナミックなプロセスである。換言するならば、日常言語の伝達は、言語的な手がかりをその発話文脈の指標の一部として参照しながら、その背後の意味を解釈していくプロセスであると言える。(中略)参照点起動の推論モデルは、この伝達における発話の指標性を考慮して提案されている。

(山梨 2000: 159)

指標性も会話の含意もどちらも暗黙の意味作用に関わるが、指標性はまずもって記号の一側面であり、発話主体の意図はその中に原則として含まれない。たとえば、地域的なイントネーションや、あるパラ言語的要素からジェンダーを指標する場合などは、話し手の身体性・アイデンティティーなどが直接効いてくる。一方、会話の含意は定義上、話し手の意図を裏付けとして解釈者によって同定される意味作用である点で根本的に異なっている。

つぎに、これらの意味作用と意図およびコミュニケーションの問題を考えることにしよう。

5. 指標性と伝達における意図

そもそも Grice の含意とは、聞き手が推論で到達するものであるが、それは彼方に想定される「話し手の意図」を織り込んだ概念であった。しかしながら、参照点起動の推論モデルは、聞き手の推論だけをモデル化しており、そこに主体性をもった話し手の存在が関与する

余地は想定されていない。その点に関しては、山梨 (2001) はむしろ参照点モデルの利点であるとし、話し手の意図の認識を前提とする意図明示的な伝達を中心に扱う関連性理論の枠組みに比べ、「聞き手 (ないしは解釈者) は、状況によっては、話し手の伝達意図が認識されない発話に関しても、主観的にその発話の何らかの側面を指標的な手がかりとして参照し、そこに聞き手にとって関連性があると考えられる意味をくみ取っていくことができる」(159-160) と述べている。

この指摘はしかし、的を射ていない。Grice の理論を認知的に定式化しようとする試みでもある関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995) では、発話解釈の推論を方向付ける「関連性の原理 (principle of relevance)」に関し、「認知原理 (第1原理)」と「伝達原理 (第2原理)」の二つを分けて仮定し、前者は特にコミュニケーションを前提としない人間の認知一般が、関連性のある方へ向くようにデザインされていると規定しているからである。

しかしながら、山梨の指摘するように、関連性理論では伝達意図の存在をコミュニケーションの前提条件としているため、指標性 (indexicality) はコミュニケーションを構成する要素には定義上なり得ない。それは Wilson & Sperber (1993) におけるコミュニケーションを構成する「二重の意図」の議論に端的に垣間見られるのでここでそれを検討したい。

Wilson & Sperber によれば、コミュニケーションにおいてはまず、「相手にかくかくしかじかの情報を伝えよう」という話し手における情報意図 (informative intention) の存在が前提とされる。また通常の言語コミュニケーションでは、情報意図を持っているということを送達しようとする意図、すなわち伝達意図 (communicative intention) も話し手の側に存在するとされる。これら2つの階層的な意図の有無によって少なくとも3つのケースが想定できるとされる。

- (i) たとえば、話し手がたまたま風邪を引いており、意図せずしわがれ声で話したとしよう。聞き手はその声の具合から「話し手は風邪を引いている」という情報を得るが、Wilson & Sperber によればそれはコミュニケーションとは呼ばず偶然的な情報伝達 (accidental information transmission) であると分類される。
- (ii) つぎに、話し手が、自分のしわがれ声で「自分が風邪を引いている」ということ聞き手が気づいてほしいと思いつつも、自分がそのように気づいてほしいと思っていることは知られたくなく、実際そうなったとしよう。この場合、情報意図は話し手に存在しつつも、伝達意図は存在していない。このようなケースを Wilson & Sperber は非明示的情報伝達 (covert information transmission) とよぶ。
- (iii) また話し手が自分のしわがれ声で「自分が風邪を引いている」ということに聞き手が気づいてほしいと思っており、またそう思っていることも聞き手に知ってもらおうと意図してしゃべったとする。この場合、話し手には情報意図と伝達意図の両方があり、どちらも聞き手に認識されたとすると、ここでは意図明示的情報伝達 (overt information transmission) が成立したことになる。

(Wilson & Sperber 1993, 一部改変; cf. Sperber & Wilson 1986/1995)

「しわがれ声」と「風邪を引いていること」の関係は指標性と呼べるものであり、これらの

例は指標性の伝達の問題の事例として読み替えることができる。まず意図明示的情報伝達そのものは言語コミュニケーションには典型的に見られる類型でありながら、「私は風邪を引いている」と言わずにその情報を「意図的に」伝達しようとする(iii)の具体例自体は、いささか特殊であることに注意しよう。また(ii)は、冷静に考えれば、「何のためにそうするのか」という疑問が湧いてくる。

そもそもこれらの事例は情報意図と伝達意図を説明するために作られた例であり、「あえて伝える」という意図が見えやすいためにこのような指標性を伴った事例が用いられているといえる。しかしまた、これらの事例は意図の伝達・認知をコミュニケーションの定義とした場合に、「指標性」という側面がその枠組みからすり抜けてしまうことを示している。しかし、それでは指標性はコミュニケーションの中にはもともと含まれないものなのであろうか。あるいは指標性の読みとりはコミュニケーションとは言えないのであろうか。

6. コミュニケーションの諸相

上記、(iii)の例において、聞き手の導き出す「話し手は風邪を引いている」という命題は、ケースによっては Grice の会話の含意と同等なものを見出すことも可能だろう。その場合、「話し手が風邪を引いている」という命題は伝達における話し手の意図に相当する。このような形以外で、指標性がコミュニケーションを構成することはないであろうか。

それは大いにあるといえよう。上記の事例でも、特に親しいもの同士の会話では、相互行為の結果、相手の感情や気分に関わる指標性に敏感となり、それが実質的な会話の流れを左右することは十分考えられる。また一般的にいて、例えば遊び (play) などの状況で、当該の状況を指標することで、行為の意味付けが変わってくるのが観察されてもいる (Cf. Bateson 1972; Goffman 1974)。たとえば、Labov (1972) はアメリカの黒人の若者の間の言葉遊び (罵りあうゲーム) 「サウンディング (sounding)」¹⁾ を観察する中で、「韻を踏むこと」などの音声的特徴や「発話ができるだけ突飛であること」などの内容的特徴が、当該発話が「儀礼的罵り (ritual insult)」であることを指標していることを指摘している。それらの指標が弱いと、発話は個人的罵り (personal insult) となり、本当の喧嘩になってしまうこともあるという。これらは発話の解釈を決定づけるコンテキストの構成に寄与していると考えられる。遊びは非日常的な、あるいは有標の (marked) 状況であるために、当該状況に関する意図的な指標が必要となると考えられるが、日常的なケースにおいても同様のことは観察されよう。たとえば、(ii)あるいは(iii)のケースのように意図的に用いることで、コンテキストを作り出すこともときに可能になるだろう (Cf. Gumperz 1982)。その意味で、関連性理論も含めた Grice 的なコミュニケーションの推論モデルにとって、指標性のコミュニケーションへの寄与をいかに捉えるかは一つの課題であると思われる。

7. 結語

シンボリックな記号観に立脚し、シンボリック記号の背後に存在する発話主体の意図を聞き手が推論するのがコミュニケーションだとする Grice 流の理論と、記号の多面性 (本稿ではとりわけ指標性に焦点をあてた) を重視する認知言語学の扱いを見てきた。山梨 (2000, 2001) の「参照点起動の推論モデル」は推論プロセスの詳細は不明であるものの、Grice 流

の推論モデルがそなえていない要素をもっていることは否めない。Grice 的語用論の一つの理論的課題（あるいは挑戦）を示しているともいえる。

また記号および発話の指標性 (indexicality) という側面は、話し手の意図とその推論をコミュニケーションの本質とする枠組みからはすり抜けてしまうという問題にも触れた。この問題は、さきに引用した山梨の指摘にも見られたように、話し手の「意図」した情報を正確に受け取ることがコミュニケーションの本質なのか、という根本的な問題をつきつけてもいると思われる。指標性のより詳細な分類に基づく語用論的考察と共に、そのような「本質」に関する議論は、今後の課題としたい。

注

1. お互いに相手の親類などの悪口を言い合うゲーム。より手の込んだ悪口（韻を踏む、複雑な構文を用いるなど）を言うか、相手より長く罵りを発しつつ勝つことが勝利の要件であるといわれる。必ずしも明確にゲームの始まりが告げられるというわけではない。例えば、次の例では 'Money' という子がゲームの開始の指標を捉えそこなっていると考えられる。

C. ROBINS: (to Money) What would you say if Boot said "Your father like Funjie!"?

MONEY: Hunh?

C. ROBINS: That's like Funjie's your father.

BOOT: He's sounding on you, Money!

C. ROBINS: No, no, if Boot said it . . .

(Labov 1972: 149一部省略)

参考文献

- 有馬道子. 2000. 『ベースの思想』 東京: 岩波書店.
- Bateson, Gregory. 1972. Steps to an ecology of mind. Northvale, NJ: Jason Aronson Inc.
- Goffman, Erving. 1974. Frame analysis: an essay on the organization of experience. New York: Harper & Row.
- Grice, Paul. 1975. Meaning. *Philosophical Review* 66. 377-88. Reprinted in Grice 1989. 213-23.
- Grice, Paul. 1975. Logic and conversation. *Syntax and Semantics*, vol. 3, ed. by P. Cole and J. Morgan. New York: Academic Press. 41-58. Reprinted in Grice 1989. 22-40.
- Grice, Paul. 1978. Further notes on logic and conversation. *Syntax and Semantics*, vol. 9, ed. by P. Cole. New York: Academic Press. 113-27. Reprinted in Grice 1989. 41-57.
- Grice, Paul. 1989. *Studies in the way of words*. Cambridge; London: Harvard University Press.
- Gumperz, John. 1982. *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanks, William. 2001. Indexicality. In: *Key terms in language and culture*, ed. by A. Duranti. Oxford: Blackwell. 119-21.
- Labov, William. 1972. Rules for ritual insults. In: *Studies in social interaction*, ed. by D. Sudnow. New York: Free Press. 120-69.
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things: what categories reveal about the mind*.

- Chicago: Chicago University Press.
- Lakoff, George. and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: Chicago University Press.
- Langacker, Ronald. 1987/1991. *Foundations of cognitive grammar*. 2 vols. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4.1-38.
- Lyons, John. 1995. *Linguistic semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山佑司. 1999. 「語用論の基礎概念」『岩波講座 言語の科学 7 談話と文脈』 東京: 岩波書店. 1-54.
- Peirce, Charles S. 1955. *Logic as semiotic: the theory of signs*. In: *Philosophical writings of Peirce*, ed. by J. Buchler. New York: Dover. 98-119.
- Shannon, Claude E. and Warren Weaver. 1949. *The mathematical theory of communication*. Urbana: University of Illinois Press.
- Silverstein, Michael. 1976. Shifters, linguistic categories, and cultural description. In: *Meaning in anthropology*, ed. by K. Basso and H. Selby. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Sperber, Dan. and Deirdre Wilson. 1986/1995. *Relevance: communication and cognition*. Oxford. Blackwell. (2nd edn, 1995.)
- Wilson, Deirdre. and Dan Sperber. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90. 1-25.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.
- 山梨正明. 2001. 「言語とコミュニケーション」『認知科学の新展開 2 コミュニケーションと思考』 東京: 岩波書店. 139-61.